

『下北半島脚本賞』 大賞作品決定

当協会では、2010年度観光客誘致促進事業の一つとして、

(財)むつ小川原地域・産業振興財団の助成を受け、

「下北を舞台にした良い脚本が、地域の財産となり、いつか映像化に

つながるかもしれない。映画や脚本を通して下北の魅力を発信できれば・・・」

との趣旨で「下北半島脚本賞」募集事業を実施しました。

大賞受賞作品 「下北早春賦」

受賞者 佐野橙子 57歳 女性 青森県東北町在住

審査評 「しみじみとした味わいがある」・・・中原俊 監督

下北半島の映像文化——その集積と定着のために!

「下北半島脚本賞」募集

下北半島は豊かな自然と厚い人情に恵まれており、
かつてから映画の名作の舞台となってきました。
今、新たな下北半島の魅力を探るべく、映画の脚本を募集します!



- 応募先 〒035-0031 青森県むつ市柳町1-10-25
(社)むつ市観光協会 「下北半島脚本賞」係
- 内 容 下北半島の観光振興を図るため、むつ・下北を
ロケ地及び題材とした映画の脚本を募集。
- 規 定 400字詰原稿用紙を使用。またはA4用紙を使用し20字×20字で
印字。50枚～100枚。(応募作品は返却しません。)
表紙にタイトル、氏名(ふりがな)、年齢、住所、電話番号、
職業、生年月日、性別を明記。
- 賞 大賞 1編 10万円 ほか
- 締 切 2011年3月18日(金)
- 諸権利 入賞作品の著作権は主催者に帰属。

川島 雄三
(映画監督・脚本家)
下北半島人の誇りと映画製作
『東影大正演』、『船の海』、『下北半島』
『下北半島』など数々の作品を執筆。



主催／(社)むつ市観光協会 協力／下北フィルムコミッション

下
北
早
春
賦

佐
野
の
橙
子
作

登場人物

ナズナ（21歳）家政婦

こごみ（58歳）ナズナの勤める家政婦派

遣事務所「おしよばん屋」の所長

夏原（62歳）妻を亡くして一人暮らし

をしている男

洋治（22歳）ナズナの恋人 美容師

紘子 夏原の妻 故人

少年（9歳）夏原の子ども時代

少女（11歳）紘子の子ども時代

小さな女の子（5歳）こごみの子ども時代

信治 夏原の小学校時代の同級生

松野 おしよばん屋のナズナの客

松野の娘

由紀

みどり

おしよばん屋のスタッフ

京子

ナズナのアパート

ベッドの中で目を覚ましたナズナ。

枕元の目覚まし時計をさぐって取る。

時計を見て、慌てて起き上がる。

あたふたとトイレに入り、出てきて、洗

面台で手を洗おうとして、鏡に写った自

分の髪を見て驚く。

髪が、数十本の細かい三つ編みにされて

いる。

ナズナ「あいつ」

三つ編みを解こうとして一本に手をかけ

るが、あきらめる。

歯ブラシを取って、乱暴に歯を磨きはじ

める。

家政婦派遣事業所「おしよばん屋」の事務所

ナズナが、駆け込んでくる。

頭に毛糸の帽子をかぶっている。

ナズナ「おはようございます」

ごごみ、振り返ってナズナをじっと見る。

ごごみ「おはよう」

ごごみ、壁の時計に、これ見よがしに目をやる。

ナズナ、つられて時計を見る。

ナズナ「あっ、すみません。」

ごごみ「時間ねがら、打ち合わせるがら」

ナズナ「はい。すみません」

ごごみ「今日のお客さんは、樺山けやき一丁目5の2の夏原さん。仕事は掃除、食事の支度、洗濯。時間は1時から3時間。はあ、12時35分だけど」

ナズナ「すみません」

ごごみ「東京さいる娘さんがらの依頼だから」

ナズナ、携帯電話を取りだして、打ち始める。

ごごみ「人が話ししてるのさ、何、携帯やってるの」

ナズナ「所長さんの言ったごと、メモしてる

んです」

こごみ「メモ？」

ナズナ「すいません。

（小さい声で）書くより、こっちの方、はえ

早
んで」

ナズナ、携帯の画面をこごみに見せる。

ナズナ「ほら、そって打てば、掃除って出る

し、せって打てば洗濯って出るんです」

こごみ、ちらりと画面を見るが、よく見

えない。

ナズナ、携帯を打ち続ける。

ナズナ「ええと、夏原さん。掃除、洗濯、食

事・・・と」

ナズナ、急に、顔を上げる。

ナズナ「娘さんがらの依頼、てごとは、本人

は、あんまり気が進まねってごとは

か？」

こごみ「ま、そういうごともあるがもの」

ナズナ「嫌だんですよね、そういうの。この

前に行った吉田さんも、娘さんはやってけ、
本人さんは入るなって、揉めで。やっと
入れてもらったけど、嫌だ顔されながら
やるって、趣味に合わねがら」

こごみ「面白い」

ナズナ「あ、解りました」

ナズナ、携帯をポケットに入れる。

ナズナ「じゃ、行ってきます」

こごみ、あきれたように見ている。

おしようばん屋の裏

ナズナ、停めていた車に向かう。

車の横腹には「おしようばん屋・いつで

もおうかがいいいたします ○○ー○○○

○」と大きな文字で書かれている。

ナズナ、それを見る。

ナズナ「だせぐね、おしようばん屋だど。

もっと普通にかっこいい名前あるべの」

広い前庭は、花の咲く植物が植えられているが、それも、雑草に埋もれている。道路から小径を入ったところに、夏原の家がある

ナズナ、車を停めて、携帯を見てメモを確認する。

うなずいて、ハンドルを切ると、小径に車を乗り入れる。

タイヤで植物が踏まれていく。

ナズナ、車を玄関脇に停めて、車を降りる。

表札の「夏原」の文字を確かめて、チャイムを押す。

間

もう一度チャイムを押す。

間

ナズナ、玄関の引き戸に手を掛ける。

玄関の引き戸が動く。

ナズナ、そのまま、一歩中に入る。

ナズナ「（小さい声で）ごめんください」

間

ナズナ「あのー、ごめんください」

間

ナズナ「あのー、ごめんくださいーい」

玄関の上がり框に夏原が現れる。

品物のよさそうなチェックのネルシャツ

の襟が半分内側に折れている。

髪は、寝癖がついて立っている。

夏原「どちら？」

ナズナ「おしよばん屋ですけど」

夏原「おしよばん屋？」

ナズナ「はい、（節をつけて）掃除、洗濯、

食事の支度、お話し相手、お買い物のお

供、何でもさせただく、皆さまのおし

よばん屋です」

夏原「その戸、閉めて下さい。寒い。（不機

嫌な声で）ま、入ってください」

ナズナ「はい、おじやまします」

居間

椅子の上に、衣類が雑然と積み重なっている。新聞が床の上に積み重なっている。茶色い輪染みのできたコーヒーカップがローテーブルの上にある。スプーンにコーヒーがこびりついている。

夏原「どうぞ」

ナズナ、回りを見回す。

夏原「と言っても、座るところがないか」

夏原、椅子の上の衣類を抱え上げる。

夏原「ええっと」

夏原、抱え上げた衣類を床に下ろす。テーブルの上の茶筒に気がついて取り上げ、振ってみる。

夏原「空^{から}か」

台所に向かって歩いて行く途中にあった積み重なった新聞を除ける。

下から別のコーヒーカップが転がり出てくる。

ナズナ「いいです、おかまいなく。

そういうのが、こっちの仕事なんですか
ら。娘さんから聞いてませんか？」

夏原「娘？」

ナズナ「さっきも言いましたけど、掃除、洗

濯、食事の支度、お話し相手・・・」

夏原「とりあえず、話し相手は、いらな
い
すよ。七十、八十の年寄りじゃあるまい
し」

ナズナ「（小さい声で）必ず、こうくる。

そういうのば、年寄りって言うんだがら」

夏原「（聞きつけて）年寄り」

ナズナ「だから、東京にいる娘さんが、心配
して、行って家事をやってくれって言っ
てるんですよ。素直にやらせたらどうな
んです」

夏原「自分で、できるから」

ナズナ「（小さい声で）こういうのば、でき
るって言うんですか」

夏原「飯だって食べてますよ」

ナズナ、黙って新聞紙の下からカップ麺

の容器を取り出す。

夏原「たまには掃除だつてしますよ」

ナズナ、コーヒークップを取り上げる。

ナズナ「このコ汚ないカップ、よく食中毒さ
ならねもんだ」

夏原「食中毒？」

ナズナ、鼻をひくひくさせる。

ナズナ「何となく臭ぐないですか」

夏原鼻をひくひくさせる。

ナズナ「その服じゃないですか」

夏原、袖を鼻に持って来て、匂いをかい
でみる。

夏原「そうかな」

ナズナ「絶対、服ですよ」

夏原「絶対つて！

ちらかったとか、汚いとか、臭いとか、
みんなあなたの判断でしょ。ぼくには、
普通ですよ、普通！」

ナズナ「これが、普通つて、どういう神経し
てるんだが」

夏原「誰かに迷惑かけてますか！」

ナズナ「かげでます！」

夏原「誰にですか！」

ナズナ「わたしに、迷惑かけてます！」

夏原「どんな迷惑です！」

ナズナ「お客さんが断ると、わたしの仕事が

なくなるんです！」

夏原「・・・」

ナズナ「掃除していいですか！」

ナズナ、バッグからエプロンを引っ張り

出して、頭からかぶって着ようとする。

ナズナのエプロンが毛糸の帽子に引っか

かって、帽子が取れる。

全部三つ編みにした髪が現れる。

夏原、それを唾然として見る。

ナズナ、自分の髪の毛に触って、赤くなる。
る。

やがて、夏原、吹き出す。

ナズナも吹き出す。

二人の笑い声がだんだん大きくなる。

夏原「変わった髪型ですね。今、そういうのが流行ってるんですか？」

ナズナ「違いますよお。朝起きたら、こうなっただんです」

夏原「・・・」

ナズナ「昨日の晩、寝てる間にカレシが結つたみたいで。あ、カレシ美容師だんで、器用なんです」

夏原「いつも、あなたの髪を結んでくれるんですか、彼は」

ナズナ「まさかあ。なしてこうやったが、わかんねけど。朝起きたら、こうなっただんで、カレシ、帰ってまっただんです」

居間

掃除が終わって、床や椅子にあったものがなくなっている。

夏原、新聞を束ねている。

台所

ナズナ、冷蔵庫を開けて見ている。

ナズナ「何も、ないですねえ。」

夏原「悪いね。働いて、お腹が空いたでしよう。」

ナズナ「なんも。気にしねんでください。」

冷蔵庫カラだば、買い物さ行くのに、かえっていいですから。あれ、あったがな、ねがったがな……って考えなくていいし。

ちよつと、買い物さ行く前にお茶にしていいですかあ。

でも、こびりっこ、何もねえ」

夏原「こびりっこ？」

ナズナ「おやつのことです。こびりって言えば、みんな笑うけど、年寄りみたいだった」

夏原「（口の中で転がすように）こびりっこ……こびりっこ」

ナズナ「あ、そういえば……」

ナズナ、居間に戻って、自分のバッグを

さぐり、ラップに包まれたものを取り出す。

ナズナ「少し固かたいがも」

ナズナ、ラップに包まれたものを開き、水を打ってから、皿に載せ、レンジに入れる。

レンジの止まる音がする。

ナズナ、取り出したものを、一枚ずつ三枚の皿に載せる。三つの湯飲みとともに、お盆に載せて居間に運ぶ。

ナズナ、サイドボードの上の写真の前に、皿と湯飲みを供える。両手を合わせて、目をつぶる。

ナズナ、振り返って、ローテーブルに、残った二つの皿と、湯飲みを置く。

夏原「ありがとう」

ナズナ「奥さんですか？」

夏原「うん。この冬に、あっちに行った」

ナズナ「恐山おやまにですか？」

夏原「おやま？」

ナズナ「恐山のことです。こつちでは、死ん

だら恐山おやまさ行ぐって言うんですよ」

夏原「おやまか・・・」

夏原、皿の上を見る。

夏原「これは？」

ナズナ「べご餅」

夏原「べごもち？」

ナズナ「きれいでしょ。うちのおばあちゃん、

べご餅名人だんです。どった模様でも作

れるんですよ。これは梅だけど、わたし

が小っちゃい頃は、ツリーとかサンの

模様も作ってくれで、友達さ配ったもん

です。今だったら、ハートば作って、バ

レンタインに配ってだかも」

夏原、湯飲みを見る。

白湯が入っている。

ナズナ「べご餅は甘いがら、かえってお茶よ

り湯っこの方が、いいんですよ」

夏原、べご餅を手にとって、一口食べる。

しげしげとべこ餅を見る。

夏原「こんな綺麗な模様じゃなくて、渦巻き

みたいな模様もありますか？」

ナズナ「あるとは思うけど」

夏原「子どもの時、食べたことがありますよ」

ナズナ「お客さん、こつちの人だんですか？」

夏原「小学生の頃、父親の転勤で、こちらに

しばらく居たんです」

ナズナ「そんだば」

夏原、またべこ餅を口にする。

夏原「そうだ、これだ。これは、ぼくが初め

て貰ったバイト代だったんです」

草むら（回想）

背丈を隠すほどに草が生えている

長い棒と泥鯱獲り用の籠を持った少女が

走って来る。少し遅れて、びくを持った

少年が息を切らして追ってくる。

少女（立ち止まって）「早く^{はえ}！」

少年「うん」

少女は、また走り出す。

草に隠れた小さな川の岸に着く。

少年も遅れて着く。

少女、草をかき分けて、川の様子を見る。

数メートルほど流れに沿って歩いては、

また、川をのぞき込むことを繰り返す。

やがて、場所を決めたる。

少女「いいが。おめは、ここで待ってる。

『よし』って言ったら、棒持って、水

ば思いつきり掻き回せ」

少年「うん」

少女、少し離れた場所に行く。

流れの中に入って、籠を水の中に入れる。

少女「よし！」

少年、岸から、流れに棒を斜めに差し込

んで動かす。

少年、少女の方を見る。

少女、少年の方に戻ってくる。

少女「いいが。棒ば、真っ直ぐに立てて、突

ぐように掻き回すんだ」

少年「うん」

少女、離れた場所に行く。

少女「もつと！」

少年、棒を差し込んで、掻き回す。

少女、ざぶざぶと流れの中に入って、籠を水の中に入れる。

少年、力を入れて突くように掻き回す。

掻き回しながら、少女の方を見る。

少女は、もう少年の方を見ていない。流れの中で、籠をあちこち動かしている。

少年、額に汗を浮かべながら、棒を動かし続ける。

少女、籠を引き上げて、その中を確かめる。

泥鰯を掴んで取り出す。それを、びくに入れる。

少年、掻き回すのをやめて、少女の方を見ている。

少年「採れた？」

少女、頷く。

少女「よし。次さ行くど」

少年「うん」

二人、駆け出す。

少女の家（回想）

古びた農家

誰もない。

台所のたらいの中に泥鯱が20匹ほど入っている。

少女、台所のポンプを押して、少年の手に水をかけてやる。

少女「きれいになったが？」

少年「うん」

少女「今日は、よぐ稼いだな」

少女、台所の蠅丁の中から、笹の葉の付いた渦巻き模様のべこ餅を二枚取り出す。一枚を少年に渡す。

少女「ほら、駄賃だ」

少年「だちん？」

少女「うめど」

小さな女の子が入ってくる。

少女「こっちゃん、家さ誰もいねのが？」

女の子「うん」

少女、蠅丁から、べこ餅をもう一枚出して、女の子の手に持たせる。

少女「ほら」

女の子、少年をじっと見る。

少女「先週、転校してきたんだ」

女の子「お兄ちゃん？」

少年、恥ずかしそうに少女を見る。

少女「んだ、お兄ちゃんだ」

少年「こっちゃんていうの？」

女の子（首を振って）「こごみ」

少年「こごみちゃん？」

女の子、頷く。

少女、女の子を抱き上げて、上がり框に

座らせる。

少年と少女、上がり框に並んで座る。

少年、おそるおそるべこ餅を口にする。

少女「（少年に）うめが？」

少年「うん」

女の子「（少年に）うめが？」

少年「うん」

三人、顔を見合わせて微笑む。

居間

ナズナ「女ゴわらしさ使われだんですか」

夏原「（むきになって）彼女はね、ただのお

なごわらしじゃなくて・・・」

ナズナ「（夏原の発音をなおして）おなごわ
らし」

夏原「おなごわらし」

ナズナ「（なおして）おなごわらし」

夏原「おなごわらし」

ナズナ、OKのサインを出す。

夏原「おなごわらしじゃなくて、師匠だった
んだ」

ナズナ「師匠？」

夏原「例えばだね」

夏原、テーブルの上から白い紙を探し出

して、図を描き始める。

夏原「川が、こういう風にこっちからこっちへ流れているとするだろう。こっちが上流で、こっちが下流だ。この川の流れが曲がっているあたりでは、内側が深くなっているだろう。ここに、泥鰌がたまっているんだ。そこをねらって、棒で水を掻き回すと、泥鰌は流れに沿って下流に逃げる。そこで、籠を持って待ち構えていると、そこに入るというわけさ」

夏原、図に矢印で泥鰌の動く方向を描き入れる。

ナズナ「すごい理屈だ」

夏原「すごかったんだよ、師匠は」

ナズナ「？」

夏原、遺影の方を見る。

夏原「女房だよ」

ナズナ、しばらく遺影を見ている。

ナズナ「（大きな声で）やあ、おじさんたら、

泥鰌すがだば採る姿さ、惚れだのが、ありえ

ねえ」

夏原「泥の付いた真っ黒な顔のおなごわらしに怒鳴られて・・・確かになあ。考えてみれば、あれが始まりだったなあ。でも、決定的だったのは、ホウの木の風車かな

あ」

ナズナ「風車？」

神社の境内（回想）

子どもたちが石けり、縄跳び、輪回しなど思い思いに遊んでいる。

大きな木の下に座り込んで、少女が小刀でホウ木の枝を削って風車を作っている。

傍で少年が熱心に見ている。

小さな女の子が、その二人を見ている。

少女、何度も、軸にした枝に羽の中心を差し込んで削り直して、羽根がなめらかに回転するように調整している。

少年「出来たの？」

少女、立ち上がって、風車を持って、数歩走ってみる。

戻って、差し込み部分を外して、削りはじめる。

少年「ダメだったの？」

少女「きづい」

少女、立ち上がって、風車を持って、数歩走ってみる。

少年「どう？」

少女「うん」

少女、軸を削り始める。

少女、立ち上がって、風車を持って、また数歩走る。

少女、首を傾げる。

戻ってくる。

少年「どう？」

少女「うん」

少女、また、軸を削り始める。

少女、立ち上がって、風車を持って、

また数歩走る。

戻ってくる。

少年「どう？」

少女「うん」

少年「これで、完成？」

少女「いや、まだ」

少女、葉の先を指で千切りはじめる。

少年「そんなに小さくしちゃって、いいの？」

少女「大きいば、ばふばふする」

少年「大きい方が、風をよく受けるんじゃない

いの？」

少女「風ば、まっすぐ受けたら回らねべ。

だから、風ば、こっちがらこっちさ、

流してやらねばねんだ」

少年「風を流す・・・」

少女、また、黙って葉を千切る。

六枚の葉が、逆台形にできあがる。

少女、枝をねじって、葉に角度をつける。

できあがった風車を、あちこちの角度か

ら見て点検する。

少女、立ち上がって、風車を体の前に突き出して、走り始める。

風車は、少女の体の前で勢いよく回る。

少年「すごい！」

少年、立ち上がって拍手をする。

少女、少年のところに戻ってくる。

頬が染まって、息がはずんでいる。

少年「ぼくにも、貸してくれない？」

少女、黙って風車を差し出す。

少年、風車を持って走り出す。

体の前で風車が勢いよく回る。

少年、何度も何度も行ったり来たりする。

少年「すごい、すごい」

少年、少女のいる場所に戻ってくる。

息がはずんでいる。

少年「ありがとう」

風車を少女に返す。

少女「・・・」

少女、しばらく風車と少年を見比べている。

少女、振り返って、近くにいた女の子を見る。

少女「こっちゃん」

女の子に、風車を差し出す。

少女「ける」

女の子、うれしそうに受け取る。

女の子、風車を持って走り出す。

少年と少女は、それを見ている。

夏原の家

ナズナ、洗濯物を入れた籠を持って縁側に出て来る。

夏原、縁側に座っている。

ナズナ「この家、物干しが二ヶ所あるんですね。どっちさ干したらいいんですか」

夏原、立ちがあって、庭の方に行き、指を舐めて立てる。

夏原「今日は、こっちな」

ナズナ「それ、何のまじないですか？」

夏原「やってみてごらん」

ナズナ、夏原を真似て指を舐め、立てる。

ナズナ「あつ、すうすうする」

夏原「だろう。でも、全部冷たいわけじゃない。よくすましてみて」

ナズナ「あ、んだ。指の、こっち側だけが、すうすうする。初めてだ」

夏原「指のすうすうする側は風が当たってるんだ。風が当たると、気化熱で体温が奪われて、それで冷たく感じるんだ。だから、そっちが風上だ」

ナズナ「すげ」

夏原「風向きによって、物干しを使い分けていたんだ、師匠は」

ナズナ、洗濯物を干しはじめる。

夏原、それを見ている。

ナズナ「奥さんは、どやして結婚したんですか。夏原さん、こっちさ居ねがったんでしょ」

ナズナ、洗濯を干し終わって、夏原の隣に腰掛ける。

甲子園球場（回想）

選手の出入口

試合前の練習日なので、慌ただしさはない。

高校生の夏原が、球場の選手の出入口の辺りに立っている。

野球部のユニフォーム姿の信治が出入口から駆け出してくる。

信治「お、夏原」

夏原「連絡、ありがとう」

信治「悪いな、わざわざ東京がら来てもらって」

夏原「試合も見に来るよ」

信治「お、そうが。なんたって、こっちは応援足りねがらな。頼むじゃ」

夏原「しかし、まさか、下北から甲子園に来るとはなあ」

信治「（笑いながら）ま、見でろ、優勝すぞ」

夏原「おう」

信治「って言っても、まだ、わいは、まだ補

欠だけどな」

夏原「一年生だしな」

信治「あ、んだ、覚でらがなあ」

夏原「？」

信治、通りかかった部員に何か二言三言

言う。部員頷く。

信治「小学校さ居た紘子ば」

夏原「ヒロコ？」

信治「よぐ、遊んだったきやな」

制服姿の女子高生が出入口から出て来る。

女子高生、ゆっくりと、近づいて来る。

信治と夏原、振り返る。

信治、女子高生を前に押し出す。

信治「覚おへでらが？」

夏原「？」

信治「マネージャーの紘子先輩」

紘子、黙って頭を下げる。

夏原「師匠・・・？」

三週間後 夏原の家

ナズナ、居間に掃除機をかけている。

夏原、庭の枯れ草を集めている。

夏原、居間に入ってくる。

夏原「春らしくなったもんだ」

ナズナ「五月ですから」

夏原「この家も、おかげでだいぶきれいにな
ったね」

ナズナ「・・・はい」

夏原「掃除は、もう大体いいんじゃないかな」

ナズナ「・・・そうですね」

夏原「雪も溶けたし・・・」

ナズナ「・・・」

夏原「どのへんだったかな、水芭蕉が咲くの
は」

ナズナ「ミズバショウ？」

夏原、テーブルの上の紙を引き寄せる。

紙に鉛筆でぎつと水芭蕉の絵を描く。

ナズナ「ああ、べごの舌」

夏原「べごのした」

ナズナ「（夏原の発音をなおおして）べごの
した」

夏原「べごのした」

ナズナ「（夏原の発音をなおおして）べごの
した」

夏原「べごのした」

ナズナ、OKのサインを出す。

夏原「べごのしたを見に行きたいなあ、来週
あたり。車、出してくれないかな」

ナズナ「解りました！」

雑木林 五月初旬

まだ、ところどころに、雪が残っている。
ほとんど植物は芽を出していない。

細い道の脇を、雪解け水が流れている。
長靴をはいて、リュックサックを背負っ
た夏原とナズナが歩いている。

ナズナ「ここら辺りだと思っうんですけど」

夏原「所長さんから聞いてきたんだろう？」

ナズナ「はい。三つ目の角ば曲がれって言うてました」

夏原「水っぽいところに咲くんだよね、水芭蕉は。この辺は、道の脇に小川も流れて
いるし、そうだとはい思うんだが・・・」

夏原、回りを見る。

ナズナ、携帯電話を取り出す。

ナズナ「ナズナです。三つ目の角ば曲がったんですけど、その後、^{あと}どう行けばいいんですか？」

ナズナ「あ、わかりました」

夏原「所長さん？」

ナズナ「はい。このまま、もう五分ぐらい歩けばいいそうです。間違っていないそうです」

夏原「所長さん、山男なんだね」

ナズナ「女おなこですけど、男よりおっかねけど

」

夏原「大女かい？」

ナズナ「いや、普通です」

夏原、急に立ち止まる。

夏原「あれじゃないか」

夏原、小走りに走り出す。

夏原、立ち止まる。

林の日陰に、一面に水芭蕉が咲いている。

ここみ、追いつく。

夏原「ここだったんだ」

ナズナ「来たごとあるんですか？」

夏原「師匠に連れて来てもらった」

小一時間後

夏原とナズナ、雑木林の切り株に腰

掛けて、水筒のお茶を飲んでいる。

夏原「雪が溶けたら、一緒に来ようって言うてたんだ」

ナズナ「奥さんど？」

夏原「去年の夏だった、ガンだって言われたのは」

ナズナ「・・・」

夏原「治療は難しいって言われてね」

ナズナ「……」

夏原「急に、下北で暮らしたいって言い出して……。大急ぎで家を探して……こっちに来た」

ナズナ「……」

夏原「秋だったから、もう、あんまり外に出られなくて」

病室（回想）

病室のベッドに横になっている絃子。

夏原が傍に座っている。

夏原「春になったら、忙しいぞ」

絃子「そうね。」

（指を折って）雪が溶けたら、一番は

じめは、ミズバショウでしょ。

それから、カタクリ、イチリンソウ。

そのうち、カエルが卵から孵って、

そうしているうちにアザミが出て、

フキが出て。

ワラビ採りもあるし……」

夏原「ほら、忙しいだろう」

紘子「そうね。大忙し。こうしてられないわ。」

夏原「・・・」

二人、病室の窓から外を見る。

曇った空が広がっている。

雑木林 五月中旬

雪の消えた土の表面に、緑がちらほらと見える。

長靴をはいて、リュックサックを背負った夏原とナズナが歩いている。

ナズナ「もう、べごの舌は見えねですね」

夏原「終わったんだね。早いなあ。一週間でもうこんなに変わってるんだな」

ナズナ「今日は、何でしたっけ」

夏原「カタクリかなあ」

ナズナ「カタクリ？片栗粉の？」

夏原「花だよ。昔はカタクリの根から澱粉を採ったんだそうだ。そう言われて掘ってみ

たけど、ほんとに小さな球根なんだ。とてもとても、一つや二つでは食べるほどにはならない」

ナズナ「師匠さんに聞いて？」

夏原「うん」

ナズナ「・・・」

二人、黙って歩き続ける。

ナズナ「どんな花ですか？」

夏原「薄い紫かな」

夏原、立ち止まって、姿勢を低くして地面を見る。

ナズナ「まだ、ないんですかね」

夏原「・・・もう出てると思うんだけど」

夏原、なおも探し回る。

ナズナ、携帯電話を取り出す。

ナズナ「そうです。おっきい道路ば真っ直ぐ来たんですけど」

ナズナ「あ、はい、わかりました」

夏原「水芭蕉よりは、もう少し乾いた、日当たりのいい所にあると思うんだ」

ナズナ「もう少し行くとYの字に分かれる所があつて、その手前右側の林の中さ、ちよこつとあるそうです」

夏原「所長さん？」

ナズナ「はい」

夏原「本当に詳しいひとだなあ」

二人、道に戻つて、進んで行く。

夏原、Y字路の手前の林の中に入つていく。

夏原「ここだ」

林の木の途切れた日当たりのよい地面にカタクリの花が点々と咲いている。

夏原、しゃがみ込んで花を見る。

ナズナも、傍に来てしゃがみ込む。

ナズナ「めんこい花ですね。首っこ傾げで」

夏原「・・・」

ナズナ「白いのもある」

夏原「これは、イチリンソウだ」

二人、イチリンソウの傍に寄る。

夏原「東京に、すごく馴染んでたと思つてた

んだ」

ナズナ「・・・」

夏原「でも、そうじゃなかったのかもしれない」

ナズナ「・・・」

夏原「都会に連れてきてやったんだから、つていう気持ちがどこかにあったのかもしれない」

ナズナ「・・・」

夏原「本当は、下北にいた方が、長生きできたのかもしれない・・・」

ナズナ「・・・」

雑木林 五月二十日頃

林の中に緑が多くなっている。

長靴をはいて、リュックを背負ったこごみがゆつくりと歩いている。時おりしやがみ込むが、また、ゆつくりと歩き出す。

おしよばん屋の事務所

ナズナ、由紀、みどり、京子が座って話している。

ナズナ「で、こつたに詳しいんだがら、所長さんに案内してもらえばいいがもしれませんねって言ったきや、最初、所長ば男だと思っただみたいたったの」

由紀「そのお客さん？」

ナズナ「所長さんは、山菜採りが趣味の山男ですか、って」

由紀「はあ」

ナズナ「女だけど、男よりおっかねって言うたきや、いくら詳しくても、おっかない人と歩くのはなあ・・だって」

みどり「確かに」

由紀「やっぱり若い方がいいべの」

ナズナ「せば、わいは若さしか取り柄ねってが」

京子「はっきり言って、そんだべ」

ナズナ「いやあ」

四人の笑い声があがる。

事務所の廊下

こごみが、ドアからそっと離れて行く。

雑木林 五月下旬

林の中にいつそう緑が多くなっている。

長靴をはいて、リュックを背負った夏原とナズナが歩いている。手には軍手をはめて、根掘りシャベルを持っている。

夏原「ほうれん草のごま和えとは比べものにならないんだ」

ナズナ「わたしだって、食べだごとありますよ。でも、そつたにうまいがな」

夏原「ほうれん草は、ごまの強さに負けるっという感じだけど、アザミは、ごまに負けないで対等に渡り合うって感じなんだ」

ナズナ「（小声で）ずんぶ褒める・・・」

夏原、木の下の地面をかがみ込んで見ている。

ナズナ「ここ、先週カタクリば見た所ですよ

ね。はあ、何もありませんね」

夏原「もう少し水気の多い所なんじゃないかな」

ナズナ「所長さ聞いたら、カタクリのあった所から、もう少し道路側って言ってましたけど」

夏原「ということは・・・この辺りかな」

夏原、しやがみ込む。

ナズナも、かがんで探す。

夏原、姿勢を低くして歩き回る。

夏原「あ、あった」

ナズナ「どこですか」

夏原「これだ、これだ」

夏原、シャベルでアザミの根元を掘る。

夏原「あ、ばらばらになっちゃった。ま、いいか」

ポケットからビニル袋を取り出して、そこに入れる。

夏原「一つ見つかりと、次々に見えるなあ」

夏原、アザミを掘る。

夏原「緑の目だな」

ナズナ「緑の目？」

雑木林 小一時間後

夏原とナズナ、切り株に座って、水筒の

お茶を飲んでいる。

ナズナ「さっき、緑の目って言っていましたよ

ね」

夏原「子ども向けの本で『みどりのゆび』で

いうのがあってね。外国の話なんだけど、

主人公のチトは、学校に行って勉強が始

まると、どうしても眠くなってしまっ

た。そして、とうとう学校から断られて

しまう。来ないでくれって」

ナズナ「わいも」

夏原「実は、チトは、すごい才能を持ってい

たんだ。そこに眠っているタネを目覚め

させることができるという才能だ。

刑務所でも、動物園でも、スラムでも、

チトが指を触れただけで、緑の芽が出てくる。ついには、父親の会社の鉄砲にも、植物の芽を出させて、花を咲かせてしまう。チトの父親は、武器を売る商人だったんだ。

やがて、殺風景だった町は、花でいっぱいになる、という話なんだ」

ナズナ「・・・」

夏原「絺子は、アザミでもワラビでも、すぐに見つけるんだ。こっちが全然気がつかないうちに」

ナズナ「・・・」

夏原「だから、悔しくなって、『みどりのゆび』からとって、緑の目というあだ名をつけてやったわけさ」

ナズナ「・・・」

夏原「緑の目も持ってたけど、緑の指も持ってたなあ。春になったら、植えたいって、タネを取り寄せて・・・」

ナズナ「・・・」

ナズナの携帯電話が鳴る。

ナズナ「え」

ナズナ、立ち上がる。

ナズナ「はい、わかりました。すぐ、戻ります」

病院 救急外来

検査室の前に、松野の娘とこごみ、なずなが立っている。

松野の娘「あんなね、今朝、おじいちゃんさ

何食わせたの？」

ナズナ「書いてあったとおりに、カレーの煮

付けと豆腐の味噌汁と、大根漬けです」

松野の娘「カレーば、ちゃんと煮たの？生煮

えだったんでねの？」

ナズナ「ちゃんと煮ましたけど・・・」

松野の娘「味噌汁の豆腐は？古くねがった？」

ナズナ「賞味期限、確かめましたけど・・・」

松野の娘「へば、なしておじいちゃんが腹痛

くなるわけ」

ナズナ「・・・」

松野の娘「（ここみに向かって）だから、若い者だばダメだってへるのさ。もっと年いった人ば、寄ごしてもらいての」

ここみ、黙って頭を下げる。

間

検査室から看護師が出てくる。

看護師「ご家族の方は？」

松野の娘、立ち上がる。

松野の娘「わたしですけど」

看護師「先生から、検査の結果について説明がありますから」

松野の娘、看護師と一緒に廊下を歩き去って行く。

ナズナ「（ここみに）すみません」

ここみ「まだ、あんだが悪いって決まってるね
べさ」

ナズナ「・・・」

ここみ、立ち去る。

こごみ、缶コーヒーを手に持って、戻ってくる。

こごみ、ナズナに一本を手渡し、長イスに座る。

こごみ、コーヒーを一口飲む。

こごみ「ああ」

立っているナズナを見る。

こごみ「座ったらいいべ。まだ、何も決ま
ってねよ。いいも、悪いも」

ナズナ、こごみの隣に座って、缶コーヒ
ーを開ける。

こごみ「喉、乾いてだったべ。病院って、乾
燥してるんだよの」

ナズナ「・・・」

こごみ「まさか、松野さんの娘さんの前では
飲まれねしの」

間

ナズナ「所長、すみません」

こごみ「だから、まだ・・・」

ナズナ「わたし、調子さのってだんです。他

のお客さんは、行っでご飯ばつくっても、
何だか当たり前みたいで・・・張り合い
なくて。それが、当然だのに・・・。

夏原さんは、面白い話ばいっぱいしてく
れるし、喜んでくれるし。山さも、一緒
に行けるし、わたし、夏原さんば、どう
やって喜ばせようかってことばっかり考
えで、松野さんさ、集中してなかったん
です。だから、罰^{ばち}当たったんです・・・

「

こごみ「・・・」

ナズナ「夏原さんの所さ、もう、行きません
誰かと替わらせて下さい」

こごみ「・・・」

松野の娘が看護師と一緒に歩いて来る。

看護師「じゃ、入院の準備をして、来て下さ
い。その前に、病室に案内します」

こごみ「入院！」

松野の娘、黙って検査室に入っていく。

こごみ、立ち尽くす。

一ヶ月後 おしよばん屋の事務所

ナズナ「行ってきます」

こごみ「ああ」

京子「また、病院さ行ったんですか」

こごみ「・・・」

由紀「何も、毎日行かなくてもいいのに」

京子「松野さん、胆嚢が悪かったんでしよう。

それだば、ナズナのせいではないべの」

みどり「娘さんが、朝ご飯の時にどうして気

がつかなかったんだって言うんだって」

由紀「だつての」

みどり「まんず、の」

京子「娘さんも、何言ってるんだが」

みどり「娘さん、なんぼが疚しいんでねの。

だから、ナズナさ、つつかかるんだよ」

数日後 おしよばん屋の事務所

ここみ電話番をしている。

電話が鳴る。

ここみ（電話）「はい、ということ、しばらく代わりの者が参りますから。申し訳ありません」

ここみ、受話器を置いて、ほおづえをつく。

同じ日の午後 おしよばん屋の事務所

事務所の戸ががらりと開く。

ここみが顔を上げる。

夏原が入ってくる。

夏原「（勢い込んで）ごめんください。こちらのお世話になっている夏原といいます。こちら、ナズナさんいらっしやいますか？」

ここみ、立ち上がる。

ここみ「お兄ちゃん・・・」

夏原「・・・こっちゃん？」

松野の病室

松野がベッドで眠っている。

ナズナが入ってくる。

ナズナ、松野のベッドの傍の椅子にそつと腰掛ける。

ナズナ、しばらく、松野の顔を見ている。

松野が目を開ける。

ナズナ「（顔を近づけて）松野さん、どうですか？」

松野、布団の中から手を差し出す。

ナズナ「え、何ですか？」

松野、ナズナの方にゆっくりと手を差し伸べる。

ナズナ、その手を取る。

松野、手に力を入れる。

ナズナも握り返す。

ナズナ、ぽろぽろと涙をこぼす。

初夏 尻屋

風の強い海辺の海岸段丘

遠くに灯台が見える

寒立馬の子馬が草を食んでいる

夏原とごごみ、馬の傍に立っている。

夏原、寒立馬の背におそるおそる手を伸

ばす。

馬が、ぶるつと体を震わせる。

二人、顔を見合わせて笑う。

夏 恐山の宇曾利湖畔

陽光に湖面が反射している。

湖の向こうに朝比奈岳が見える。

ごごみ、湖の岸で、石を拾っては、小さな

三角錘に積んでいる。

夏原、それを見ている。

二人、出来あがった石積みに、目を閉じて手を合わせる。

二人、顔を見合わせて微笑む。

初秋 釜伏山展望台

夜

ここみと夏原、展望台から半島を見下ろしている

夜景が眼下に広がっている

夏原、下の方を指さす

ここみ、頬を寄せて夏原の差す方を見る

秋 川内のワイナリー

すっかり紅葉した山

ワイン工場の外

夏原とナズナがテーブルを挟んで座っている

テーブルにワインのグラスがある

夏原、ポケットから紅葉した葉を一枚取り出し、ごみに差し出す。
ナズナ、それを、ワインに浮かべる。

ふたたび春 水源地公園

夕暮れ

ライトアップされた桜の木が満開を迎えている

夏原とごみ、時おり足を止めながら、桜の下を歩いている。

桜が散って、ごみの髪に花びらが幾枚もつく。

夏原、ごみの髪に散り落ちた桜の花びらを取って、ごみの掌を開かせる。

夏原、花びらを次々に、ごみの掌に載せていく。

ごみ、黙って掌の上の花びらを見つめている。

海辺 一年後の春

日差しに波が反射している。

砂浜を、洋治とナズナが歩いている。

ナズナ「夏原さん、何十年ぶりに会って、ど

やして、すぐ解ったんだべ、所長のこと」

洋治「愛の力だべ」

ナズナ「どっちの？」

洋治「両方だべ。」

でごとは、わいが、二人のキューピッド

ってわけだな」

ナズナ「なして」

洋治「わいが、ナズナの髪ば結った。それば、

見て夏原さんが、大笑いしたがら、家で

仕事ばさせてもらうごとが出来た」

ナズナ「だがら？」

洋治「もし、ナズナの髪が笑いをとらねば、

ナズナは夏原さんの家さ、こったに行く

ことはなかったべ？」

ナズナ「んのだの」

洋治「それで、松野さんのおじいさんが、入院しねば、おめは、夏原さんの仕事ば休まねがったべ」

ナズナ「んのだの」

洋治「なしてナズナが来ねべって、夏原さんが心配して事務所さ来ねば、所長ど夏原さんが再会することもなかったべ」

ナズナ「んのだの」

洋治「中ばぜーんぶ抜いでみる。わいが、髪ば結ったがら、二人は再会した、ってなるべ。だから、わいは、二人のキューピッドだべ」

ナズナ「何だか納得できねけど……。それに、キューピッドって柄が？キューピッドだべ」

洋治「何、言^へってる」

ナズナ「洋治、何で、わいの髪ば結ったの？」

洋治「恋人^{かれし}がせつかく尋ねて来ているのに、

ぐうぐう寝でまる女は、めんこいが、

めんこくないが、どっちだと思う？」

ナズナ「（小さな声で）ごめん」

洋治、砂浜をいきなり走り出す。

振り向いて、ナズナに叫ぶ。

洋治「正解は、めんこいでした」

ナズナ、洋治の方に走り出す。